

思を記念する此上なき勞作云はねばならない。(菊判一
二三七頁、東福寺發行、非賣品)〔藤〕

● 樺尾山
高山寺明惠上人

村上素道編著

鎌倉時代、法然、親鸞、榮西等の諸高僧が出現した際に、教界の明星として一方に光輝を放つてゐたものは明惠上人であつた。本書は上人が流離困厄の中に在り乍ら毅然として聖道の復興の爲めに起ち、如來の正法を末世に實行せんことを努力した生涯の行蹟を詳叙したもので、著者が禪僧であり乍ら上人を景慕する餘り、各種の史料を討ねて之を著はされたのである。その内容は、初めに行實年譜を記し、次に逸事、法語、交遊、餘譚を述べ、附録として系譜、上人著作目録、日用清規、高山寺置文等を載せてあつて、上人の全象を明にせんことを努めてある。明年は上人の七百回遠忌に相當するが、此の際に本書が出て、此の高僧の清高なる人格を世に傳へるのは誠に悦ばしい事で教界に感動を與へることが鮮少でなからう。

(菊判三四〇頁、樺尾高山寺發行、價參圓)〔松野〕

● 修訂 建武年中行事註解 和田 英松著

建武年中行事は後醍醐天皇の御撰、順徳院の禁秘御抄と共に有職故實の研究に最も重要な典據をなすものなることは後水尾天皇が兩者をならべあけて寔に末の世の龜鑑なりとたゞへ給うた御言葉によつても知るべきが出来る。然るに禁秘御抄には古來數多の註釋書があるに反し、建武年中行事は窺ひ見るべきもの少く僅に谷村光儀の略解があるのみ、それも文字通りの略解であり、且つ本文にも亦誤脱が尠くない。本書はかくの如き缺を補はるゝが爲に著書が嘗て群書類説本を原とし諸本を以て對校すると共に、その全文に就いて詳細な註解を加へて公刊されたものゝ増訂再刊である。別に附録として同じく後醍醐帝の御撰たる日中行事に就いて大石千引の略解を校定し附載してゐる。著者はかくの如き仕事に最適の人現實の種々なる事情に餘儀なくされて古典の教養に貧しからざるを得ない現下の學徒に裨益する所が少くない。殊にその卷末に附せられたる詳細なる索引は、本文中に

挿入された幾多の繪圖と共に利用如何によつて營に本文の理解を輔けるのみではないであらう。(菊判三一九頁、定價二、八〇、東京明治書院)

●名家尺牘

渡邊得次郎編

編者渡邊得次郎氏は大阪に於いて勤王家遺墨の蒐集家として聞えたる人、今回其の襲藏にかゝる多數の名家尺牘の中、稍々史料に資すべきものゝ筆蹟鑑賞に値するものゝを擇んで時を定めず逐次刊行を企てられたが、本書はその第一輯である。收むるところ、明治廿八年五月廿二日、臺灣受授のこゝに關して大藏大臣松方正義に宛てたる伊藤博文の書狀以下十通、必ずしも時代の新舊、事件の種類等に依つて類別しない。蓋しその方針が勤王志士碩學鴻儒等の鬱然として輩出した時代に於いて主として忠忱を披瀝せる文字を擇録し、以て社會風教に資するあらしめようとするにあるからである。毎通必ずその釋文と解説とを附し、別に卷末に金子堅太郎、本多辰次郎、藤井甚太郎、中村徳五郎等諸氏の説話、史論を載せて其

等の理解を助けてゐる。就中藤井甚太郎氏の「維新史料としての尺牘」なる一文は本書刊行の有する意義をも明にするものゝいへる。第二輯以下續々刊行せられんことを望む。(美濃判和装、非賣品)

●要 大日本御歴代皇紀

大日本皇紀刊行會編

卷頭に掲けられた三浦博士の序文は本書の内容性質意義等を述べて最も要を得てゐると思はれるが故に轉載して以て紹介に代へる。「大日本御歴代皇紀は國民として知らざるべからざる國史の智識を最も簡捷に習得せしめんとする意圖の下に成り、其内容は皇祖の天壤無窮の神勅を始め國民の龜鑑として日常反復服膺すべきものにあらずるはなし。就中御歴代要記は其根幹をなすものにして歷朝の主要なる事實を年次を遡うて列舉し、朝鮮支那西洋の紀年を其下に現はして對照に便せる一種の年表なるも上欄に天皇の降誕、踐祚、即位、讓位、崩御の年月、山陵の所在、皇后、皇子、皇女等の御名を大書して讀者

をして先づ當代の天皇に對する印象を深からしむるが如き他の類似書に觀ざる編者の用意の存するものあり。思ふに古來我國民性の間に新奇を逐うて過去を顯みざる習性あるは古語拾遺の著者をして書契ありてより以來古へを談ずることを好まず浮華競ひ興りて還つて舊老を嗤るこいはしめたり、而かもよく國體を辨へ舉國一致外敵に當りて國基の安泰を保ち得たりし所以のものは國民の大多數が建國の由來より國史の精華につきて正確なる概念を有せしに由るものにして、其知識の源泉は實に座石一部の年代記に仰けるのみ、年代記の習得は決して輕視すべきにあらざるなり。今や昭和の聖代に當り國民はもとより年表的智識を以て甘んずべからず、故に本書は御歴代要記の記事を精選して内容の充實を期するに共に、憲法皇室典範皇室令其他の國民必須の要典を具載して時代に順應せんことを圖れり、斯くして成れる本書は現代國民の國史に關する知識の最少限度なり。國民にして若し日常少閑を割きて本書の記事に寓目せんか、其思想行動に於て庶幾くは些の遺憾なきを得べけん、而して本書の

編者も亦將來其版を重ねる毎に増補修正を加へて眞に毎戸に備ふべき國民必讀の寶庫たらんことを期せざるべからず。云々。裝頂頗る華美である。(四六倍判八六八頁、定價二五、〇〇、東京大日本皇紀刊行會)〔以上栗田〕

● 森田節齋と姫路

武岡 豐太講述

本書は節齋が萬延元年姫路に赴き約五十日間滞在して藩校に於て講義を爲したが、其間氣節文章を以て士氣を鼓舞し延いて明治維新に對し大なる貢獻を爲した事を述べたもので、去る大正十五年、述者が兵庫縣立姫路高等女學校に於て講演された際の速記録を訂補したものに、史料の一部を添載したものである。此の研究前後約三十年に涉つた由であるが、其の熱心の程眞に敬服に堪へない。維新史研究者の參考にすべき書物である。(菊判一六頁、神戸市武岡豐太發行、非賣品)

● 茶 道

高橋 龍雄著

茶事は古來遊戲として取扱はれ、而も奢侈的亡國的な